

物語に見る日本母性の構造 母性の「場」の試み

物語に見る日本母性の構造 母性の「場」の試み

加 藤 実

The Structure of Japanese Motherhood Revealed in Traditional Japanese Family Tales

Minoru Katou

Abstract

This research is an attempt to shed some light on the structure of Japanese motherhood through an analysis of Fairy Tales. In comparing Japanese and Western motherhood major differences can be observed. Western motherhood places emphasis on individuality. However, Japanese motherhood seems to lack individualism, and appears to be controlled by a sense of total ambience of place. This pervading sense of ambience can also be observed in life in contemporary society. In this paper I will analyze the typical characteristics of Japanese motherhood. By analyzing fairy tales handed down from ancient times in Japan the basic characteristics of Japanese motherhood can be observed. In this paper I will take up the fairy of princes Anju and king Dzushi. In this tale what becomes clear is that Japanese motherhood is dependent on ambience of place. Individual feelings dissolve into the overall ambience, and who is feeling what cannot be discerned. In this paper I define this all-pervading sense of the ambience of place as ba. Further, what also becomes evident is that as people develop changes occur through ba transference. Thus, Japanese motherhood depends on ba, and ba are plentiful in Japanese society. Later, I hope to analyze the structure of ba in more detail.

Received Apr. 30, 1997

は じ め に

日本の母性と欧米の母性とを比較すると明らかな違いが見られる。⁽¹⁾ 筆者は長年カウンセリングを専門に多くの親と面接をしてきて、知らず知らずのうちに親の姿をイメージするようになった。それは、話をしていると、いつの間にか個人は、姿を消して「親一般」の顔

になるということである。個人が消えて、親一般という抽象的な顔になる。さらに進んで、自分が積極的に関わろうとする力が、感じられなくなる。と言って、何もしないわけではないが「させてもらう」と言う、他力主義になる。主体性が消えていく、間接的な行動になっていく。このように行動することが、自分に与えられた定めであるかのように、素直に従う。勿論、こうした面接の経過の変化は、カウンセリングの経過として分析することも出来るが、著者は、自分の面接の経験から、そこに、親が「親として生きる」場合の、共通性を感じるのである。

こうした日本の親が持つ、親としての共通性は、日本の親の深層として分析が可能と考える。ここに親の役割の一つである「育てる」機能に視点を定め分析を試みることにした。即ち「母性」として分析をする。

ここに、日本の母性を分析するにあたって、日本で最も一般に親しまれていると思われる「さんせい太夫」を説教の形で取り上げる。即ち、「説教さんせい太夫」として、その中に、民衆の心として、溶け込んでいる「日本母性」の構造を分析したい。

ここで研究を始めるにさきだって、「説教」について立場を明らかにしておきたい。岩崎武夫氏⁽²⁾は、説教について「説教とは、中世末期頃の民衆の世界を、発生の母胎とする語り物である」と述べられている如く、祭りの日に寺社の境内で、羽織を着た男が男女数人を相手に語られていたものらしく、筆者の子供の頃にも、これと似たものがあつた。祭りの日に、寺の境内で参詣の人を相手に、話をしたり、物を売ったりしていた風景を、子供心に今でも覚えている。勿論中世期の説教は、筆者が子供の頃に見たものとは違うものであろうが、祭りの日に寺の境内で、語り物が催されていたことは、充分頷けるし、あり得ることと思われる。ここで、語り物が、寺の境内で、祭りの日に行われたことについて、これは単に人集めの便利さからだけからか、ほかに理由があるのであろうか。

岩崎武夫氏⁽³⁾は次のように述べている。少し長いが引用する。

「語るという行為が、まだ純粹に芸能になりきる以前の呪術宗教的な要素をはらみ、語り歩くことが生活であると同時に、信仰の表白であり、呪術的な効験がひそかに期待されていた時代の説教のものにとって、寺社は口過ぎの場として存在する以上に、まず聖域であつた。おそらく念仏聖などと同じように、寺社において、彼らは身心の浄化と蘇生を体験したであろうし、漂泊のためのエネルギーをそこから汲みあげ、語り歩いたと思われる。」

即ち氏は、寺社という場の持つ意味に着目しなくてはならない事を示している。同時に、祭りの日におこなはれた事にも、やはりそれなりの意味があるのではなかろうか。祭りは死んだ人の魂が現世の人と交流する場として位置づけ出来るとされている。

この様に考えると、寺社で祭りの日に説教が行われたことは、説教の内容分析と同じくらい大きな意味を持つことになる。

この時代の説教は、物もらいのための芸、乞食芸であつたようで、荒木繁氏⁽⁴⁾は「説教

節が賤民の芸能であったことは、もはや疑いあるまい。」と述べている。これからみても分かるとおり、説教が一般民衆のものであったことは、確かなことである。一般民衆が一般民衆を相手に、寺社の場をかりて、祭りの日に語られたことに、大きな意味を感じる。即ち、ここで語られているものは、一般民衆の心の表れであり、しかもその心は、深いところから沸き上がってきた心である。一人ひとりの深い心の現れは、共通性を持って我々に語りかけてくる。

こんな理由から「説教」には一般民衆の共通の心が、充滿しているものと思うのである。「説教」の中でも日本人によく親しまれている「説教さんせう太夫」を取り上げ、日本人の深層の一端なりとも触れることができればと思う。この「説教さんせう太夫」は、安寿とづし王丸の成長の記録でもある。どのような過程を経て、づし王丸が成人するか、安寿はどのようにづし王丸の成長を助けるか。この成長過程の中に、日本的な母性（育てる心）が表現されているものと思われる。

母性（育てる心）には文化によって違いが見られる。日本型の母性と欧米型の母性では明らかな違いが見られる。それは、日本人の子育てと、欧米人のそれとを比較して見ればよく分かることである。日本人は、優しく甘さが見られる。欧米人は、厳しく自立性を小さい時から重んじる。これは単に育て方の、かかわり方の違いではなくて、もっと深い国民性の現れであり、その背後には、長い年月をかけて培われた、民族の文化が、大きく横たはっているものと思われる。

物語に見る母性

ここで分析の対象としたさんせう太夫の物語は説経節⁽⁵⁾、説経集⁽⁶⁾、説経集⁽⁷⁾に基づいて分析をすすめる。

ここで物語のあらすじを示すと次のようになる。

国は、奥州で54郡の将軍で、岩城の判官正氏は、強情なため筑紫の国安楽寺へ流された。そのため、奥方は、姫と若共々大変嘆かれた。ある日、づし王丸は、つばめの飛ぶのを見て、あのやうなつばめさえも、親を二人持っているのに、私たちは、父と言われる人がない、と嘆くので、それならば、みんなで父のもとに旅立とうと、安寿、づし王、乳母と奥方で、夫恋しさに、伊達郡信夫庄より越後国直井の浦に向かって、旅立つことになる。時は3月17日ほんの一時のつもりで旅に出たのが、後で大変な事になろうとは、思いもしなかった。30日ばかりで越後の国直井の浦につく。ここで一夜の宿を探すがなく、野宿をしているところを、山岡太夫に誑かされる。母と乳母は、蝦夷に、安寿とづし王は、丹後の国由良に売られる。乳母は、途中海に身を投じて死ぬ。安寿とづし王を買った山椒太夫は多くの奴隷を使う土地の支配者である。太夫は安寿に「しのぶ」と名付け、づし王に「忘れ草」と名前を付けた。しのぶは、潮くみに、忘れ草は、芝刈りに行かせた。なかなか上手くいかないのに、何時も

暗い顔をしていたので、太夫は三郎（太夫の三男で非情な性格）を呼んで正月と言うのに物ぶの悪い（縁起が悪い）と言うので芝の庵を造って、そこにかくまうことになった。この辛さのため、安寿はづし王に脱走をすすめる。しかし、運悪くこの話を三郎（太夫の三男）に聞かれてしまう。そのため、真っ赤な焼きゴテを、十文字に額に当てられる。さらに、太夫は、安寿とづし王を松の木湯船の下で、年をとらせ、食事を与えず飢え死にさせようとする。太夫には五人の息子がいるが二番目の次郎は慈悲深い人で、松の木湯船に食事を運んで二人を助けた。生きていることを知った太夫は、二人を共に山で働かせる。安寿は、この機に、づし王に逃げるように進める。山から逃がしてやる。これを知った太夫は、安寿を拷問にかけて攻め殺す。安寿16才の一期である。づし王は、逃れて丹後国の、国分寺にかくまわれる。太夫は追っ手を国分寺に使い、づし王を出すように責め立てるが、住職は、大誓文を立て、づし王を守る。三郎は、あきらめずに探す。づし王は地蔵菩薩の助けによって無事難を逃れる。地蔵菩薩によって助けられたづし王は、お聖様にすがりつき、すべてを打ち明ける。そして聖の背に負われて、都の西の七条朱雀権現堂に来て、ここで、づし王と分かれ丹後の国に戻られる。ここで、づし王は乞食の子供たちと生活を共にし、土車に乗せられて、南北天王寺へと送られてくる。づし王は、石の鳥居に取り付いて、聖徳太子の計らいで足腰が立つようになった。ここで、づし王は、おしやり大師のもとでお茶くみの仕事をする。

梅津院と申される都の貴族は、子供に恵まれなかったが、ある時、神のお告げで「天王寺へ行け」をきき、院は養子を求めて天王寺に来た。ここで、院はづし王に会い、養子とする。づし王は帝に会い志太・玉造の系図を示して、奥州五十四郡を返してもらおう。づし王は、国分寺の聖に会い喜ぶと共に、姉のその後をきき、太夫親子を召喚し、七日七夜首を引かせる極刑を持って報いた。づし王は蝦夷に渡り、盲目になった母と対面する。殺された姉の安寿は、今日でも金焼地蔵菩薩として人々からあがめ奉られている。

以上が物語のあらましであるが、ここに語られている内容は、祭りの日に寺社の中で物もらいを目的とした乞食芸であった⁽⁸⁾ ようで賤民の芸として位置づけされている。⁽⁹⁾ こうした賤民の芸が民衆に受け入れられるためには、荒木繁氏⁽¹⁰⁾ は「民衆固有の信仰・土俗と結びつき、民衆の意識、感情、想像力を汲み上げたものでなくてはならない。」「したがって、その語り物は、外からの唱道者の強化の意図と、内からの民衆の要求との相互作用の中で、展開し流行していった」と説明されている。すなわち、説経節は、賤民の語り節ではあるがその心は、一般大衆を代弁しているのである。民衆の心そのものである。これを分析することによって、日本人の心に触れようとするのが今回の試みである。特に日本人の母性の特徴について、物語から実証的に考察をしてみたい。

1 旅立ち

さんせう太夫の物語は、人格発達の物語としてみる事が出来る。未完成な一個の人格

(子供)が、いろいろな困難に出会いながら人格を完成させていく。人格は、周りの環境とのあいだに、相互関係を持ちながら発展していく。情緒的に見ると可愛想であっても、それは、人が成長するためには、必要なことである場合が多い。すなはち、その出来事には、成長にとって大切な意味が隠されているのである。

あらいたはしや御台所は、姫と若、伊達の郡信夫の莊へ御浪人をなされ、御嘆きはことわりなり。ある日の内のことなるに、いづくとも知らずして、燕夫婦舞ひ下がり、御庭のちりを含み取り、長押の上に巢をかけて、十二のかひごを暖めて、父鳥互ひに養育つかまつる。つし王丸は御覧じて、「なう、母御様。あの鳥、名を何と申す」とお問ひある。母御この由きこしめし、「あれは常磐の国よりも来る鳥なれば、燕とも申すなり。又はぎ婆とも申すなり。なんほう優しき鳥ぞかし」。つし王丸はきこしめし、「あら不思議やなけふの日や。あのやうに天をかくる燕さへ、父・母とて、親をふたり持つに、姉御やそれがしは、父といふ字ござないぞ、不思議さよ」

帝の勘気を蒙って流罪となり、残された家族が心理的に動揺するところである。父親を奪われた母子家庭がどのように変化していくか。づし王は、燕の飛ぶのを見て自分には父親がない、と言って嘆く。発達は、欠乏を補うところから始まる。父親がないことに気づいたづし王は、自分に欠けている物を自覚し、発達のスタートラインにつく事になる。この欠乏に、気づかせてくれたのが、燕であるところに意味がある。鳥はユング心理学では、魂を表すとされている。河合隼雄氏⁽¹¹⁾は「鳥は突然にひらめく考えを表すが、このようなひらめきは、無意識内に存在する心的内容が突如として意識内に出現することによって生じる。」と鳥が無意識の心的内容の現れと位置づけている。

ここで、づし王は、自分の心の中に、父を求める気持ちのあることを、鳥(燕)を介して気づいたのである。いわば、自然が、づし王を刺激したことになる。一般的な教育的刺激ではなく、自然(燕)が人の意識を刺激したのである。づし王の毎日の生活は、愛情深い母親によって何不自由なく生活が送れていたはずである。づし王の母は、終始深い愛情を子供に示していた。従って、自分の生活環境の欠陥(父親のないこと)に気づく事はないはずである。しかるに燕がそれに気づかせてくれた事の意味は大きい。

ここに発達を促す自然の力を感じる。自然はうまく出来ている。うまく事柄が配置されている。母親の強い愛情に支えられて、生活していた、づし王は、燕の親子を見て、身の不運に気づく。この父親欠損は、内面的にはエネルギー不足と見る事が出来る。エネルギー不足の時は、そうでない時よりも、むしろ世界がよく見えるものである。それは、エネルギーが、意識から無意識に流れて、ためにエネルギー不足になるのであるから、心の主体が意識から無意識に移行し、心の囁きとなって現実生活に影響を与えるのである。この点を河合⁽¹²⁾

は次のやうに述べている。「——欠如性は、心の内部のこととして見れば、心的エネルギーの欠如を示すものと考えられる。——（このエネルギーの欠如は）観点をかえると、より真実を把握している——拡大した形で——とも言うことができる。」すなはち、づし王は、欠損なるが故により真実に近づけたのである。と見ることもできる。

づし王に促されて母は上京を決意する。

「さほどに思い立つならば、自ら共に上らん」と、御乳母うわたき一人御供にて、忍びやかに旅の用意をなされたり。国を三月十七日に、事かりそめに立ち出でて、のちの後悔とぞ聞こえける。

づし王が、それほどに言うならば、と母は旅立つことにする。づし王の意欲に押されて母は、旅立つことを決意するのであるから、づし王の旅立ちの動機づけの強さがわかる。そして、ほんの一時のつもりで旅に出るあたりは、軽率のそしりを受けようが、そのため、大変な苦難の道を、歩まねばならない事になるのである。しかし、この苦難は、人が成長するに、欠かすことの出来ない大切な試練と考えると、この軽率さが却って意味を持ってくる。当時、女、子供の旅がどんなに危険なものであるかは、少し考えればわかる。ここに意識を凌ぐ強い無意識の力の働きを感じずる事が出来る。——事かりそめに立ち出でて——とあるように、軽い気もちで出かけている。すなはち意識が退行現象を起こし幼児化していることを示している。子供っぽい純粹さと、情緒的なところが見られる。

2 母子の別れ

やがて一行は直江の浦につくが宿が無く野宿となる。ここで山岡太夫にたぶらかされて、母子は別れ別れとなる。

殊に哀れをとどめたは、二艘の船にてとどめたり。五町ばかりは類船するが、十町ばかりもゆき過ぎて、北と南へ船がゆく。御台この由ご覧じて、「さてあの船とこの船の、間の遠いは不思議やな。同じ港へ着かむかよ。船こぎもどいて、静かに押さいよ船頭殿」。

これが母子の別れの場面である。ここで母は子供を突き離すとか、子供が母から逃げ出すとか、そのようなことは一切無く、終始母と子は、深い愛情で結ばれていた。一緒にいることを願っていた。にもかかわらず、この親子は別れなくてはならないのである。ここにも自然の力を感じるのである。母子分離は、人の発達上必要な事であるが、それが時には、人の

手によって行われ、時には自然の力によって行われる。人は、母性の育む力によって育つが、また一面母性によって成長を阻まれることもある。母性のこのマイナスの面を避けるために、母子分離が行われる。づし王は母の愛によって育てられてきたが、いつかこの母の力によって成長が阻害されることになる。これが母性の二面性である。日本ではこの母性の裏面を自然の力によって回避してきた。すなはち運命的な母子分離がそれである。

母からの自立のテーマを扱った物語にグリム童話集の傑作ヘンゼルとグレーテルの物語がある。我が国のさんせう太夫の物語と内容が同じなのでよく比較され論じられてきた。本論文においてもさんせう太夫のテーマを明確にするために随所で比較検討を試みることにする。

ここにヘンゼルとグレーテルの物語のあらましを示す。⁽¹³⁾

昔、一人の貧しい木こりが、女将さんと二人の子供と一緒に住んでいました。男の子をヘンゼル、女の子をグレーテルといいます。ある時、この国に大飢饉がやってきて、みんな食べ物に困りました。そこで女将さんは、子供たちを森へ捨てることを木こりに提案しました。木こりは、大変驚きましたが、ついに承知しました。この大人たちの話を聞いた子供たちは、前の晩に小石をポケットいっぱい詰め込んで、女将さんたちと一緒に山へ出かけました。山へ行く道すがら、子供たちは、小石を目印に落としていきました。山へついて、女将さんたちは、子供をおいて、家に帰ってきてしまいました。ヘンゼルとグレーテルは、小石を頼りに家に帰ってきました。女将さんは大変驚きましたが、また少し日が経つと、また子供を、森に捨てる相談をしました。今度は、子供たちはパンくずを目印にしましたが、鳥がつついて目印になりませんでした。ついに森の中で道に迷ってしまいました。暫くすると、雪のように真っ白な小鳥が二人を、お菓子の家に案内しました。その家の中から、一人のおばあさんが出てきました。大変親切にヘンゼルとグレーテルをもてなしてくれました。しかし、このおばあさんは魔女だったのです。ヘンゼルとグレーテルを太らせて食べるつもりです。しかしヘンゼルとグレーテルも負けてはいません。おばあさんをかまどの中に突き落として逃げ出しました。途中かにも助けられて二人は家に帰りました。女将さんはすでに死んでしまっていました。

づし王の母は終始愛情深い母親である。一方、ヘンゼルとグレーテルの母は徹底した「悪」の姿を演じている。ここに母性の二つの面を、二つの物語の中に見ることが出来る。すなはち、前者には母性の＋の面を、後者には母性の－の面を見ることが出来る。づし王の母は母性の＋の面が表面に出ているのであって、母性の－の面が存在しない訳ではない。ヘンゼルとグレーテルの母も同じである。＋の面は持っているが表面に出ないだけのことである。こ

のように理解することも可能である。

母性における「個」と「場」

母性に＋と－の二面性のあることを見てきた。しかし、この二つの面は単に紙の表と裏というような、単純なものではない。＋の面をづし王の母に、－の面をヘンゼルとグレーテルの母に見ることにする。

づし王の母は前に記したように愛情深い母である。子供を放り出すようなことは、死んでも出来るものではない。この愛情深く、子供をいたわるづし王の母の行動の意味するものは何か。愛情を「包み育む」行為と考ええると、づし王の母の愛情は、人間の他者に対する、とりわけ母が子に対する基本的なしかも原初的な行為のように思われる。非常に暖かみのある、太陽の光のような、万物を育てる力を持った行為のように思われる。しかし、育つと言うことは、単に大きくなると言うだけではない、それは、「そのものらしく」なることを意味する。人は人らしく、男は男らしく、女は女らしく、である。これが成長発達であると考ええると、づし王の母の愛情は、まさに包み育む原初的な愛で、人が育つ上で基本的なものではあるが、しかし、発達の方向性を持たない（——らしさのない）原初的な愛情である。これに対して、ヘンゼルとグレーテルの母の子供に対する扱いは、個性的である。方向性を持った意識を感じることが出来る。

子供を捨てることを、自分の責任において行おうとしている。母が自ら、親子分離の場面を、自分の責任において作り出しているのである。親から離された子供は、多くの困難に遭遇し、それを乗り越えて大きく成長するのである。このヘンゼルとグレーテルの親子分離には、親の主体性と自発性が感じられる。この違いをどの様に見たらいいのか。何処からこのような違いが出てくるのか。

づし王の母のような愛情は「場」的な愛情の形と言えないであろうか。即ち、すべての人に対して平等に示される愛は、温室の空間のように、愛情の空間を形成する。「場」を形成する。づし王の母の個人的な特徴（愛情における）は後退し、一般的な愛情が全体を覆いつくす。づし王の母の愛情には、個性が感じられない。別の見方をすれば、「母」ではなく「母性」へと移行する。一方ヘンゼルとグレーテルの母の子供に対する行動は、個性的で、かつ特徴的である。目的を持った厳しさを感じず。即ち、この行動は「個」の姿をとる。その形は「母」から「個」へと移行する。

母性—————母—————個性

母性は母なるもの一般を表し、個性はより個人的なものを表す。このより一般的なもの、より個性的なものとの対局で表すことが出来るのは、この二つの要素が、移行の可能性を内包しているためと見る事が出来る。別の言い方をすれば、深層と現実層との連

続と考えることもできる。深層は母なるもの一般，現実層は，個性を持った一人の人間を表す。母が表現される時，現実の世界では「個」が強調され，深層面においては「母なるもの一般」が優位をしめる。づし王の母が子供に対して示した愛情は，日本の母なるもの一般の愛情である。ヘンゼルとグレーテルの母の子供に対する扱いは，より個性的なものである。母なるもの一般は，前に記したように「場」の性質を持つと考えると，個性的なものは，点としての独自性を持つ。

1 場の構造分析

日本の母が子供へ示す愛情は，非常に暖かみのある，太陽の光のような，全般的で，全てのものに行き届いた，平等的なものである事を見てきた。これを場として表現すると，この場の構造は如何なるものであろうか。日本の母は，母としてではなく，母なるもの一般として，即ち，場の姿を持って表れ，母なるものの中に自分を埋没させ，その個性を失う。場は，多くの母を飲み込んで，母なるものとして，個人としての母の上に君臨する。ちょうど，個が集まってゲシタルトを構成するが如きである。個はゲシタルトの力の上に個性を失い全体の一要素として働くに過ぎないこととなる。

A あいうえおかきくけこさしす

こ
け
く
さ
し
す

B あ い う え お か き

さ
し
す

上の図でAは，一本の棒を表し，Bの図は十字を表す。しかしいずれも13個の文字から出来ている。すなわち，各要素は同じであるが，違ったゲシタルトを構成する。ゲシタルトは部分要素より常に優位な位置を保ち場の性格を決定する。

づし王の母としての特性は消え，愛情に満ちた母性一般の特性が，前面に出て全体像を形成する。このゲシタルトの中に個が埋没するため，そのゲシタルト（場）の責任者は個人ではない。ヘンゼルとグレーテルの母は，個人の責任において子供を捨てた。しかし，づし王の母は個人としての行動ではなく，母なるもの一般としての行動である。づし王の母は，個人としては，存在しないのである。その母なるもの一般の「場」の代弁者に過ぎない。づし

王親子の別れは、まさに運命的と思はれるもので、それだけに聞く人の涙を誘うものである。づし王の母もこの別れを大変悲しく受けとめている。しかし、づし王の母は自分で母子分離の決断をしなかった。そのため、悲しみという代償を支払わなくてはならなかったのである。運命に流される人の世を、人は空しく、はかないものとして、深く感じ入るのであろう。が、これも自分から決断しなかった代償と考えれば、納得のいくことである。

2 運命として全てを受容する

大きな運命の力によって引き裂かれた母子は、頼るは神仏のみ。

「……姉が膚に掛けたるは、地蔵菩薩でありけるが、自然きやうだいが身の上に、自然大事があるならば、身代りにもお立ちある、地蔵菩薩でありけるぞ。よきに信じて掛けさいよ。又弟が膚に掛けたるは、志太・玉造の系図の物。死して冥途へゆく折も、閻魔の前のみやげにもなるとやれ。それ落さいな、づし王丸」

運命に逆らうことの出来ないづし王の母は、ひたすら地蔵菩薩にすがりあがることが強い。

ここで、神仏をどう考えたらよいか、どのような意味を持ったものと考えたらよいか。母性を場の構造から考えるとき、神仏は個を離れたその場に充満する大きなエネルギーと考えられないであろうか。個の力は全体に吸収され大きな力となって個に逆戻りしてくる。これを運命と考えてはどうか。このように考えれば、日本の母性は個を持たない運命的な特異な存在と考えることが出来る。何にしても、づし王親子は、運命にもてあそばれることになる。

運命として、全てをあるがまま受容することが、説経節さんせう太夫を聞く者にとって、ごく自然に感じられるところに、日本人の母性の元型（14）を見る思いがする。ヘンゼルとグレーテルの物語に見る母性は、強く戦う母性であり、自分の責任において物事をすすめようとする主体性が感じられる。さんせう太夫の物語には、それが感じられない。明らかに戦う意志は感じられない。地蔵菩薩に全てを任せて、「冥途へゆく折も、閻魔の前のみやげにもなるとやれ」と言っている如く、徹底して地蔵菩薩を信じ、全てを任せている姿が、よく感じられる。

3 うわたき入水の意味

母子の別れを、徹頭徹尾運命のしからしむる事として、全面受容してきた親子であったが、ここにおいて乳母が一人海中に身を投げて死ぬ事件が起きる。

うわたきの女房、「承つてござる」と、「賢臣二君に仕へ貞女両夫に見えず。二張の弓

は引くまい」と、船梁に突っ立ち上がり、しゅへんの数珠を取り出し、西に向って手を合はせ、高声高に念仏と十遍ばかりお唱へあって、直江の浦へ身を投げて、底の藻屑とおなりある。

乳母は、自分の行く先の運命を悟り入水したのであるが、全てを地蔵菩薩に任せたはずの者が、なぜ、ここで命を絶たなくてはならないのか。地蔵菩薩に身を任せ、他力本願で生きればよいのではないかと、疑問がもたれる。死をどのように考えたらよいか。ここに示されている死は、再生の意味を持った死と考えられる。従って、次のように考えたらどうであろうか。すなはち、——うわたきの死は、己を殺し、より大いなる力（場）に溶け込み生き還る——再生の一過程と考える。死と再生のテーマはよく論じられるところであるが、この場合、再生の姿は、母性の場のエネルギーとして緊張を高めるに一役買っているのではなかろうか。

(死) 母性————個性
場のエネルギー————菩薩に任せる
(非現実の世界) (運命)

このように考えることが出来ると思うが、この場合、さんせう太夫の母性の一つの特徴として、現実と非現実の境界線の曖昧さが指摘できると思われる。死もまた生の一形態として、無意識的に受容されているのではなかろうか。この生の形態が個性的な方向に向かわず、非現実の世界の方向に向かって、より大きく、流動的に形態化されているところに、大きな特徴を認めるのである。いずれにしても、母性を支える深層に大きなエネルギーを持った場を考える事が出来る。

4 安寿とづし王の苦難

さんせう太夫に買われた姉弟は、太夫より「しのぶ」と「忘れ草」の名を付けられる。そして、いよいよ厳しい仕事を、課せられる事になる。

「————まづ姉のしのぶは、明日にもなるならば、浜路に下がり、潮をくんで参るべし。まつた弟の忘れ草は、日に三荷の芝を刈りて参りて、太夫をよきに育まい」とお申しある。五更に天も開くれば、鎌とおふこ⁽¹⁵⁾と桶と柄杓を参らす。あらいたはしやきやうだいは、鎌とあふこと桶と柄杓を受け取りて、山と浜とにござあるが、あらいたはしやな姉御様は、とある所に立ちやすらひ、桶と柄杓をから

りと捨て、山の方を打ちながめ、「さて自らは、この目の前に見えたる、多い潮さへえくまぬに、鎌手取ったることはなし。手元覚えず手や切りて、峰のあらしが激しうて、さぞ寒かるらう悲しや」と、姉は嘆かせたまふなり。

弟のつし王も浜の方を眺めて、姉の身を案じる。

「さてそれがしは、この辺りに芝さへえ刈らぬに、あの立つ白波にも、女波男波が打つと聞く。男波の潮を打たせては、女波の潮をくむとかや。女波も男波もえ知らいで、桶と柄杓を波に取られて、浜あらしが激しうて、さぞ寒かるろ、悲しや」

あくまで優しい、徹底した愛情を示す母親から、引き離されたつし王姉弟は、生まれて初めての苦難に直面する。さんせう太夫という無慈悲な支配者に、慣れぬ仕事を強いられることとなる。つし王は芝刈り、姉は、汐汲みと別々の仕事を強いられる。全く一人で、独力で、この困難を切り抜けてはならない事になった。たれも助ける者はない。あの愛情深い母親も今は居ない。しかも仕事が自然を相手にする課題である。自然の中での修行と考えられる。人を相手の修行ではない、人を相手の修行なれば、そこに人の情が働き、人間関係が生じ甘えも出よう。しかし、自然を相手の場合は、甘えが許されない。自然の大きさと自分の小ささとがしっかりと認識されることであろう。成長の第一歩は、自分の力と、自分の存在のなんたるかを、しっかりと認識することに始まる。

母親からの分離は、運命的に行われた。母から別れたつし王姉弟は、全く一人で自然を相手に頑張る運命に置かれる。この課題は、いかにも人の成長の理に叶ったものである。この成長に必要な諸条件が、運命的に、うまく配置されているところに、自然の力を感じる。この諸条件の配置が運命的に、しかも悲しいできごととして、人の心をうち、涙をそそるのは、どう考えたらよいか。思うに、人が成長するには、それ相応の代償が必要であろう。成長のための努力が必要である。つし王が成長するには、この悲しみという代償が、必要になるのである。おのれの力を知ることが必要であろう。人の力を宛にせず、独力で課題を乗り越えることが必要であろう。甘えは許されないのである。

このつし王姉弟に対して、早くも味方が現れる。

「——山へゆき、芝を刈らいつでもどるならば、邪見なる太夫・三郎が、責め殺さうは一定なり。人を助くるは、菩薩の行と聞く。いざや芝勧進をしてとらせん」

山へ行つて芝を刈らずに帰ったならば三郎（太夫の三男で残忍非情な性格の持ち主）によって責め殺されてしまう。人を助けることは、菩薩の修行と土地の人が、つし王の芝刈りに手をかす。つし王を助けることを、第一目標にするのではなく、人助けが菩薩修行に必要な

からするのである。ここにおいても直接的な関係ではなく、「場」的な関係が読みとれる。さて、さんせう太夫を取り巻く土地の人たちの暖かい気持ちに支えられて生活が進行する。

「育」の場

づし王にとって姉の安寿は、いかなる意味を持つのであろうか。づし王の成長にとって、どんな意味があるのか。

姉は弟のことを思い、弟は姉のことを思って、さぞ辛かろうと嘆く。自分の辛さよりは兄弟がお互い相手のことを心配する。づし王姉弟は大変厳しい環境のもとに今は置かれている。少しばかり土地の人の温かい心に触れることが出来るが、後は殆ど自分に敵対する要素ばかりで孤立した状態である。厳しく教える環境ではあるが、育てる心が感じられない。ここに姉弟が「育てる人」「育つ人」の関係を互いに担って居るのではなかろうか。姉の安寿が育てる役を、弟のづし王が育つ役を、果たしているのではなかろうか。母親から離れた姉弟が成長して行くには、母親役は絶対必要である。ヘンゼルとグレーテルの物語にもそれは見られるところである。

ここで、物語の中では二人の主人公として描かれているが、現実には一人の人の中に二つの存在が併存していると考えられる。一人の心の中に主人公が二人存在すると考えたらどうか、物語はあまりの苦しさに姉弟ともに自殺を考え実行しようとする。

1 づし王と安寿の自殺

姉弟は一緒に自殺をしようとする。

「さても御身は弟なれども、男子とて自害せうと申すかや。さて自らも身をも投げうと思うたに、待つて待ち得てうれしやな。その儀にてあるならば、いざさらば来い。身を投げう」とおぼしめし、たもとに小石を拾い入れ、岩鼻にお上がりあって――

姉弟の存在を一つの心の中の出来事と考えると、それが「死」を決意するのは、死んで新しく生まれかわる事を意味している。死と再生がここで行われる。

2 小萩によって自殺がとめられる

死を決意した姉弟は、越後の国直江の浦で別れた母と、筑紫安楽寺に流されている父に、別れを告げ身投げしようとする。ここで、伊勢の小萩がこれを見て「やあやあ、いかにきょうだいよ。命を捨つると見てあるが、命を惜へきょうだいよ。命があれば、蓬莱山にも会うと聞く。又も御世には出づまいか。――」と、自分の身の上を話し自殺を思いとどまらせる。小萩は二人にとって姉の役をかって出る。大きな助っ人である。力強い存在である。

3 小萩の存在

さんせう太夫という無慈悲な存在に対して、地元の人、それに自殺を救った小萩が、二人の再生に力をかすこととなる。この小萩の存在を岩崎氏⁽¹⁶⁾は次のように分析している。

「二人を献身的に救った伊勢の小萩という女奴隷には自己犠牲や自己献身のモラルが貫かれており、平等な相互扶助の論理が見られる。——呪術的なまじないや祈祷（誓文）の威力、地蔵の靈験の加護によって、それから身を守ろうとしている。」

犠牲的で献身的で、しかも人の力を越える大きな存在の加護によって、二人の存在が守られている。地元の人が二人を助けたときも——人を助かるは、菩薩の行と聞く——のように菩薩の存在を意識して行われている。

個人の力よりは、菩薩の力によって二人が救われたことを示す。小萩の存在は、二人が成長するために包み守る役目を果たしている。これに対して、さんせう太夫の存在は、岩崎氏によれば⁽¹⁷⁾「さんせう太夫に強調されているものは、貪欲と無慈悲のモラルであり、さらに譜代下人（奴隷）に対する忌み穢れ＝軽視を媒介とした差別の論理である。——武力的な脅しや、その行使によって支配の権威を押しつけようとする——」のように分析されている如く、差別と支配が背景に存在する。小萩の存在は、この様な厳しい環境の中で暖かみのある母性を示すものであるが、そのあり方は、あくまで運命的である。

4 別屋の意味

神、仏の力を感じさせる助けにあいながらも、やはりその仕事は、苦しいもので、姉弟は、何時も泣き顔をしているので縁起が悪いとされ別屋に隔離される。

「やあ、いかに三郎。あのきやこれよりも奥方、山中の者なれば、正月といふことも知らずして、いつも泣き顔をしているものならば、一年中の物ふのわるいことにてはあるまいか。あれらきやうだいの者どもをば、三の木戸のわきに、柴の庵を作って、年を取らせい。三郎いかに、」

いつも泣き顔をしているので縁起が悪いと別屋に隔離されるのであるが、そのために姉弟は、一緒にいられることになる。一緒にいることが二人を新しい行動に進ませることとなるのである。ここで別屋を岩崎氏は⁽¹⁸⁾次のように述べている。「別屋とは、簡単にいえば、血縁非血縁を含む被官とか譜代下人とかよばれる身分的奴隷性の強いもの（一種の奴隷であり、さんせう太夫は安寿とづし王を譜代下人とよんでいる）の住む所である。」この様に別屋は忌みれたものを隔離するところである。安寿とづし王は忌みれたものとして差別を受けたこ

とになる。

隔離という状態は、人の成長のある時期には、大変意味のあることである。外界からの刺激を遮断して、内的変化と充実を待つ大変意味深い時期である。最も忌み嫌われる時期が人の成長にとって最も大切な時期であること、に人の存在の二面性を見ることが出来る。

5 逃亡計画

別屋に隔離された二人は、身の不運を嘆きながらも、何とかこの幣束状態から抜け出して望みをつかもうと逃亡計画をたてる。この逃亡計画を三郎（太夫の三男）に聞かれる。罰として額に焼きゴテを当てられる。逃亡とは、いかなる意味を持つのか。それは、隔離した状態からの巣立ちを意味する。新しい状態への躍進を意味する。この新しい状態への躍進である逃亡に失敗することは、まだ充分躍進への機運が熟していないことを意味する。成長発達には時が必要である。ここにも人の力を越えた自然の大きな力を必要とする。太夫は焼きゴテを額に当てさらに二人を松ノ木湯船のしたに閉じこめた。

6 松ノ木湯船

額に焼きゴテを当てられ、絶望的になっているのを救ったのは、二郎である。そして、松ノ木湯船に閉じこめられ、餓死させられそうになったのを、救ったのも二郎である。

「——松ノ木湯船のその下で、年を取らせい。食事をもくれな。ただ干し殺せ」

太夫は、このような厳しい仕置きを二人に架したのであるが、密閉した場所で絶食を経験することは、仏道に帰依する者が、修行として不眠不休不臥絶食によって身を清め悟りを開こうとすることに通ずる。厳しい仕置きの形を取って強制されているこの課題が、見方を変えれば、悟りを開く大切な修行となる。ここに課題の二つの姿を認めるのである。安寿とづし王に架せられた課題は、陰険で残酷であるが、それは同時に発展への第一歩である。

このてん、岩崎氏は⁽¹⁹⁾「結論からいうと、それは禁忌される存在であることが、逆にもっとも聖化される可能性のある存在であるとする、信仰的確信に支えられた論理の発見にあった。」このように分析されている。強い禁忌は大きな可能性につながる。

7 づし王の脱走

松ノ木湯船に閉じこめられた二人は、二郎の慈悲にすがって助かり、これを知った太夫は、二人を山の仕事につかせる。太夫の所につれてこられた当初は、二人は別々の仕事であった。

いまは、二人そろって、山の仕事をする事となった。二人そろって仕事をする事は、二人の主人公が統合されることで、人格の成長がさらに一歩進んだことを意味する。そして、新しい場を求めて逃亡が試みられる。この場合二人揃って逃亡をするのではなく、安寿に助けられてづし王が脱走するのである。即ち、安寿の犠牲のもとに、づし王が逃亡し世に出るのである。安寿は、弟づし王を逃がして、世に出してやりたいと願った。しかし、見つければ自分が殺されることは、充分予測がついていたはずである。死を持って償はなくはない事を承知で、弟づし王を逃がしたのは、生と死が切り離し難く結びついていることを示している。

8 安寿の死

太夫は、安寿がづし王を逃がしたと知るやきつい拷問にかけ責め殺す。

邪陰なる三郎が、「承り候」とて、十二格の登り階に絡み付けて、湯責め水責めに問うふ。それにも更に落ちざれば、三つ目錐を取り出だし、膝の皿を、からりからりと揉うで問ふ。――正月十六日日ごろ四つの終りと申すには、十六歳を一期となされ、姉をばそこにて責め殺す。

このようにして、安寿は殺されるのであるが、この死は、一体何を意味しているか。さんせう太夫は、無慈悲、強欲な土地の支配者であるが、殺しやではないはずである。強欲なら、生かして働かせることの方が、大切ではなかろうか。それなのに、なぜ殺さなくてはならないのか。一方、安寿は、なぜ太夫の残忍非道な仕打ちに対して闘おうとしないのか。ここに示されるのは、ひたすら耐える安寿の姿と、ひたすら逃げるづし王の姿と、それに太夫の飽くなき残忍さと、その実行である。更に言えば、こうしたことが、土地の人とあまり関係なく、閉ざされた世界でおこなわれている、ということである。

安寿とづし王が、母と別れて太夫に売られて行くときも、運命として受け入れられている。闘う姿は、見られない。太夫にひどく扱われれば扱われるほど、それに増して強く耐える姿が見られる。耐えることによって抵抗のエネルギーが強く深く内在化される。このエネルギーが大きくなった時、それは逃走のエネルギーに転換する。逃走は、新しい成長の場を求めて、移動が開始される。これをまとめると次のようになる。

- 1 残忍非道な支配者の場（この場は周りの世界と殆ど交流のない世界、周りから影響を受けない世界）

- 2 1の場に運命的に置かれた安寿とづし王
- 3 1の場においては支配する者と、支配される者とが運命的に共存する
- 4 支配される者は耐えることによって、自然に1の場から次の場へ移動するエネルギーを獲得する
- 5 1の場から次の場に移行するのに「死」の体験を必要とする

この場合、死の体験とは何を意味するか。安寿とづし王を、現実の世界における二人の主人公と考えることもできるが、また同時に、一人の人間の中の二つの存在と考えることもできる。人格が未熟な場合、自我が成長過程にあるとき、自我の統一が出来ず不安になることがあるが、この時の状態ににている。安寿の死は、づし王から見れば、自我の統一が図られた事になるのではなかろうか。

「場」の移動

づし王は、姉の犠牲によって太夫の館から逃げ出す。途中追手をかけられて、これまでかと、づし王は、太夫と刺し違えて死のうと、観念するが、姉が身を持って逃してくれたことを思い、思い直して、とことん逃げることにする。

諏訪・八幡も御示現あれ、逃れんところとおぼしめし守刀の紐を解き、太夫が心元に差し立てて、あすは閻浮の塵とならばなれ、とおぼしめさるるが、待てよしばし我が心、姉御様の、たんじやう心を持つなとお申しあつてござあるに、かなはぬまでも落ちてみばやとおぼしめし、――

かくて、づし王は「国分寺」に逃げ込み、かくまわれる。

1 国分寺に逃げ込むことの意味

づし王が、安寿の助けによって太夫の所を逃げ出して、国分寺に置われる事となった。この国分寺は、づし王にとってどんな意味があるのだろうか。寺は、ごく一般的には、先祖の魂をまつところ、死者の魂をあの世に送るところ、と考えることもできる。寺の「場」は、この世とあの世とを結ぶ接点と考えられる。物理的には、一つの建物であるが、その「場」は現世の秩序の及ばない聖地である。現世を支配する太夫が、多くの手下を連れて踏み込んでも、づし王を捕まえる事は出来ない。づし王は、太夫の力の及ばない「場」に守ら

れる事となる。この場は、現世の秩序を越えた大きな自然の力の働く場で、人の力ではどうすることも出来ない、超越的力の場と考えられる。この場を構成する要素は、聖であり、大誓文であり、地蔵の加護である⁽²⁰⁾。この場は太夫の館での生活を断ち切る働きを持ってはいるが、それ以上のものではない。新しい成長を推進するには、別の新しい場が必要となる。

2 づし王の告白

国分寺に匿われたづし王は自分の身の上から、今まで経験した太夫の館での体験を、全部聖に話した。

「なうなう、いかにお聖様。名乗るまいとは思へども、今は名乗り申すべし。我をばたれとかおぼしめす。奥州五十四群の主、岩城の判官正氏殿の総領に、づし王丸とはそれがしなり。さて不思議なる論訴により、都へ上り、みかどにて安堵の御判申し受けに上るとて、越後の国の直江の浦から売られてに、あなたこなたと売られて後、あの太夫に買い取られ、刈りも習はぬ芝を刈り、くみも習はぬ潮をくみ、その職がならいでに、これまで落ちてござあるが、又太夫の内に姉が一人ござあるが、自然都の路次をお問ひあらば、教へてたまはれお聖様。それがしは都へ落ちたうござあるよ」。

づし王は、全てをお聖様に話すのであるが、この告白が大変大きな意味を持つのである。この告白には二つの意味がある。一つは聖様に自分を知ってもらふ事。もう一つは、話すことによって、自分の自分に対する認識をより鮮明なものにすることである。自分の自分に対する認識を、明確なものにすると言うことは、自分の過去の姿を、自分の心に納得させ定着させることを意味する。自分の歩んできた過去を自分の生涯過程の一コマとして肯定的に受容することを意味する。過去を肯定的に受容した時、未来への積極的な、肯定的な活動が望めることになる。

自分の過去の告白が、国分寺という場において、住職の聖に対して行われている所に、大きな意味を見いだすことが出来る。前に記したように寺は、現世と来世の接点と考えると、また、別の考えをすれば、人間社会と自然との接点と考えると、そのような場で告白をすることは、人の力を越える大きな存在に身を預ける事を意味しているのではなからうか。ここで大きな力を得て、強く羽ばたく第一歩が印されたことを、意味していると見る事が出来る。

づし王の話を聞いたお聖は、全てを納得して、づし王を背負い京都へと向かう。京は、七条朱雀通りの権現堂まで来る。ここでお聖は、づし王をおいて引き返す。

「それがしが都へ参り、安堵の御判を申し受け参らせたうはござあるが、出家の上ではならぬこと。これからおいとま申す」

づし王とお聖は、互いに形見を交換して別れる。づし王は鬢の髪を、お聖は衣の片そでを、お互いの交換して別れる。

3 天王寺への過程

お聖はづし王をおいて丹後の国へ帰ってしまう。朱雀権現堂に置かれたづし王は、子供たちに助けられて天王寺に来る。歩行も満足に出来ないづし王は、天王寺の石の鳥居にすがって、立てるようになった。

朱雀七村のわらんべどもは集まりて、「いざや育み申さん」——「いざや土車を作って、都の城へ引いてとらせん」——「いざやこれより南北天王寺へ、引いてとらせん」——づし王殿は、石の鳥居に取り付いて、「えいやつ」と言うてお立ちあれば、御太子の御計らひやら、又 づし王殿の御果報やら、腰が立たせたまひける。

朱雀権現堂に放り出されたづし王、しかも足腰が弱って立てなくなっているづし王は、その後の生死は、全く運に任されることとなる。生活力の全くないづし王の運命は、都の乞食の子供たちの情けに頼ることとなる。人が成長するとき自分の力で成長したように思うが、実はそうではなく、人の情けで生き延びるときがある。づし王は、今まさに、自然の中に放り出された非力な存在である。

ここで、づし王は、石の鳥居にすがって立つことが出来るようになった。「立つこと」すなはち「自立」である。鳥居と言えば神社の象徴である。神仏の力にすがって自立が可能になる。

人を育てる母性の機能が人（母）によって行使される時と、人（母）を離れて場がその機能を担うときとがある。この場合は後者で、神社と言う場が育てる機能を持ち個人である特定の人物は姿を消すことになる。この場合、普通の場合ではなく、神社と言う場であるから、単なる成長の場ではなく、生死の転換の場と考えた方がよい。なぜならば、前に見てきたように、神社は現世と来世の接点としての機能を持つものであるからである。

4 再生の場としての天王寺

神社としての特異性は述べたところであるが、もう一つの面として神社は、乞食のたむろ

する所である。乞食の世界は、現世の世界であるが、この世の秩序の及ばない世界でもある。現世にいて、現世の秩序のない世界で生きることが、やがて、自分を新しく生き返らせるものになる。即ち、死と再生のテーマがここにも見られる。

日本の母性を考える時、欧米の母性と違って個人が自分の責任において闘い事態を改善する姿が見られない。見られるのは、自分が姿を隠すことである。この物語りで展開する母親との関係も、母子分離の必要な時期に親子は、運命的に別れさせられる。そして、さんせう太夫の所で過酷な仕事に就かされるのも、又それは運命であると、受けとめられるのである。太夫の残忍さ、三郎の暴力は、個人的性格が強いように思われるが、全体から受ける印象は、やはり、場の性格によるところが大きい。太夫も、三郎も、場を代表する役者にすぎない。

二郎の優しさ、安寿の励まし、小萩の忠告、村の人たちの親切、国分寺のお聖の救い、天王寺にたむろする乞食の子供たちの、仲間としての受け入れ、更に鳥居の持つ奇跡、こうした諸々の働きを担う存在が個人と言うよりはその場に強く結びついている。場の性格として特徴づける事が出来る。異なった性格を持った場が存在し、その場を移動することによって、個人の中に変化が生まれる。この場の移動が実に運命的に行われる。人為的なものを感じさせない。

これに対して、欧米では場の変化が個人（母）の努力と責任のもとに行われる。ヘンゼルとグレーテルの物語で考えてみると、母親は一家を救うために子供たちを山へ捨てることを主人に提案する。ヘンゼルとグレーテルは山に置き去りになる。山に捨てられたのである。これが西欧の物語りに見る母子分離の姿である。安寿とづし王の母は、子供たちにとっては、限りなく優しい母である。この何時も変わらない優しさを示す母親が、子供から別れるには、人の力を越える大きな力を必要とする。即ち、運命的な別れである。一見残酷に見える母子の別れに、成長のエネルギーが隠されているのである。残酷さと優しさは、子供へのかかわりの二面性と考えられる。この母子分離の日本の特徴は、人の力に頼るのではなく、自然の力に頼ろうとする点にある。ここで問題になるのは、この自然の力が適切に働いて、必要なときに、場の移動が実施されれば、問題はない。この点の保証はない。しかし、自然はよく出来ている。自然は見事に場の移動を完成させる。安寿とづし王が母と父を頼って家を出るときも、子供が遠足に行くように浮かれてはしゃいで出かけている。女子供が一步家から出ればどんな事になるかは少し考えれば判ることである。この点は、前に分析した通りである。太夫の所での労働も最後は、兄弟一緒に働かせたため逃走を促進した。国分寺に避難した。国分寺は避難の場所ですれ以上のものではない。避難して身の安泰がはかられれば次に都へ上る意欲が出てくる。これもごく自然なことである。都に上り天王寺に子供たち（乞食の子供）と仲間になる。子供たちと仲間になることが次の変化を呼び起こす。

このように見てくると、日本の母性は全体的には大きな自然の力に根ざし、部分的には、小さな場に依存して変化が促される。個人の特徴や力は場の中に埋没し、その個性を失う。

個性を場に埋没させることによって、かえってその力を大きく強く発展させる。づし王の母は、づし王と別れてからもづし王に影響を与え続けている。安寿の存在はづし王の活動のエネルギー源になっている。

再 生

天王寺のおしやり大師の目にとまり奉公（お茶くみ）する事となる。ここで、梅津の院の養子にと乞われて承知する。そして、帝と対面してもとの地位に復活する。

梅津の院は御覧じて、はるかの下におはします、づし王殿の額には、米といふ字が三下りすわり、両眼に瞳が二体ござあるを、確かに御覧じて、「それがしが養子に、お茶の給仕を、それがしに賜れ」――

昨日まで乞食の子と遊んでいた者を、養子にするというので、みんな驚くが梅津の院は、子供を湯風呂で身を清めさせ、装いを新たにしてみれば、他に並ぶ者のないほど立派になった。

ここでは、乞食の子同様の卑しい子が、梅津院に見いだされることは、偶然ではなく、づし王の心の中に新しい生命が芽生えたことを意味する。そして、身を湯で洗う事によって再生が完了するのである。湯が新しい命を生み出すのである。そして装いを新たにすることは、現実世界に適應するために、社会的な秩序を身につけることを意味している。天王寺という場においてづし王は生まれ変わったのであるが、再生が完了するには、幾多のプロセスを必要とした。

天王寺――鳥居――おしやり大師――梅津院――湯――装い

ここまで来て、奥州五十四群の主に返り咲くには、今一つ志太・玉造の系図の巻物を証拠として提出することが必要であった。

二条の大納言、この巻物を取り上げ、高らかにお読みある。「そもそも欧州の国、日の本の將軍、岩城の判官正氏の総領、づし王判」とぞ読むだりけり。みかど覧ありて、「――長々の浪人、何よりもって不便なり。奥州五十四群は、元の本地に返しおく。日向の国は馬の飼料にまいらす」と、薄墨の御綸旨をぞ下されける。

このように帝に認められて、名実ともに現世に再生し、名誉を回復したのである。ここで社会的地位の回復には、社会的に通用する現世的証拠が必要であった。生命の再生転換は、神社という場において行なわれたが、社会的身分の回復は、現実的証拠を必要とする。

ここで、人を育てる母性と言う観点からこの経過を見てみると、どの様になるであろうか。天王寺が、特殊な力を持つ場であることが判った。特定の個人の働きによって、事態が変化するのではなく、個人が持つ力や「もの」が持つ象徴的な力、それに歴史的伝承が持つ力などが、一つの場の中に溶け込み、特殊な力を持った空間を形成する。従って、誰の力でもない誰彼と特定しがたい全体が持つ特殊な空気によって空間が特徴づけられ、その空間の持つ力によって個人が規定される。鳥居は、「もの」であるが、これは単なる「もの」ではなく場の性質を代表する力を与えられた存在である。人は、この特異な力を持った特異な、もの存在に、全面的に依存して、同一化して変化を遂げる。おしやり大師も個人が力を持っているのではない。その場を代表する役割を担っているにすぎない。

「湯」は前に記したように、命の転換を媒介するもので、母性の育てる機能に照らして考えると、人格の深いところ即ち、深層における変化と見ることが出来よう。人が生まれたときに使うのが産湯、死ぬときに湯灌を使う。このように生死に深く関わっているのが湯である。湯を使うことによって、甦ったづし王は、大きく飛躍をすることになる。

1 再会

奥州五十四群の主に復帰したづし王は、国分寺のお聖と再会をする。づし王はお聖より安寿の身の上を聞く。

「さればこそとよ、姉御前は、御身を落としたとがぞとて、邪見なる三郎が、ついに責め殺して候。捨てたる死骸を取り寄せて、この僧が火葬にいたし、その死骨・剃り髪」とて、涙とともに取り出だし、づし王殿に参らす。

づし王は、安寿の死を知って「さてそれがしはこの度は、世に出たかひも候はず」と泣き伏すのであるが、この安寿の死の意味については、前に触れたように、同一人の中の二つの自我、の統一と考えるのが、適当のように思う。青年期に自我統一が果たされ、個として成長していくとき、悲しみに満ちた孤独感を体験する。一つのものが成長するには、他の者は死ななくてはならない。成長する喜び、生まれる喜びよりは、死んでいく悲しみが全面に出る。安寿の死とづし王の悲しみは、再生のための死であり、悲しみである。

づし王は、姉を死に追いやった太夫に、復讐の刃を向ける。この復讐がいかにも残酷である。勿論、太夫が安寿を殺した時も、残酷そのものであるが、身分を取り戻したづし王が、太夫と同じ残酷さを示すのは、どう解釈したらよいか。

国分寺の広庭に、五尺に穴を掘りて、肩より下を堀り埋み、竹ののこぎりをこしら

へて、「構へて他人にひかするな。子供にひかせ、憂き目を見せよ」

竹の鋸で親の首を引き切らせる仕打ちは、かなり残酷なものである。しかし、長男の太郎と次男の二郎には引かせなかった。三郎が親の首を竹鋸で百回ほど引いて首を切り落とす。時は六つ時とのこと。

づし王が、国分寺に匿われるとき、助けてくれた太郎、それに、太夫の館でづし王を守ってくれた二郎には丹後の国八百八町を二つに分けて二人に分け与えた。三郎は、浜に連れ出し、往来の人に七日七夜首を引かせた。

国分寺のお聖を命の親と定め、伊勢の小萩を姉御と定め都へ上らせた。

このやうに、太夫親子に賞罰を与え、関係した者に賞を与えた。

賞罰を鮮明にしたづし王の行為は、何を意味しているのであろうか。づし王の太夫に与えた罰は、超過酷なもので、現実の社会では見ることの出来ないものである。づし王の与えた賞は、あまりにも大きく、現実の社会ではあまり見ることの出来ない大きな賞である。この二つの賞罰は、賞罰の両極をなすもので、現実世界とは縁の薄いものである。現実には、程々の所で行われる。このように考えると、づし王の行為は、非現実的行為と言うことになる。

づし王を取り巻く環境、即ち彼を育てる母性の場は、未だ現実性の薄い世界に漂うて居る思いがする。

2 盲目の母地藏菩薩の御利益によりて開眼

づし王蝦夷が島で、盲目の母に出会う。

いたはしや母上は、明くればづし王恋しやな、暮るれば安寿の姫が恋しやと、明け暮れ嘆かせたまふにより、両眼を泣きつぶしておはします。千丈が畑へござありて、粟の鳥を追うておはします。鳴子の手縄に取り付きて、「づし王恋しや、ほうやれ。安寿の姫恋しやな。うわたき恋しや、ほうやれ」と言うては、どうと身を投ぐる。

母は、安寿とづし王のことを思い、泣き、ついに盲目となった。子供のことを思い、ために失明となる。母がいかに子供のことを考えているか、理性を失った盲目的な愛情になっていることを示している。づし王の母の愛情、即ちづし王を取り巻く母性の場は、何時に変わらない愛情に包まれたものである。包み込む、抱き包む母の愛情は、時として子供の成長を妨げる。この母性の一の面をうまくカバーするのが日本母性の特徴である。即ち、子供から遠ざかることが自然に行われる。遠ざかること即ち、親子分離は、物理的に距離を置く方法と、近くにいる相手の存在に気付かずにいる方法と、二通り考えられる。づし王の母が盲目になっていたことは、後者を意味し、母性の一の面を自然に防いでいる。即ち、母性の子

供を包み込み抱き込んで成長を妨げる働きを、母親が盲目になることによって未然に防いでいる。しかしこの母親のあり方は、本能的な動物的なもので、理性的な配慮が感じられない。日本の母性の多くが、この本能的な段階で、深い愛情を子供に示してはいるが、そこには、自我の関与が認められない。従って、母性的ではあるが、個性的ではない。日本の母親に個性を感じることが少ないのは、ここに由来するものと思われる。日本人全体に個性が欠ける、顔が見えないと言われるのも同じ土壌の結果と考えられる。母性の持つマイナスの面をマイナスとせずプラスに転換するには、強い自我の関与が必要になる。母子の強い原初的な絆を乗り越えて新しい知的な絆を再構築するには、賢明なる自我の関与が必要になる。しかし、づし王の母の母性には、自我の臭いがしない。づし王の母の母性には、理性的決断が感ぜられないが、づし王を取り巻く場に示される母性のあり方には、「育てる」機能が巧みに配置されている。この点はこれまでに見てきた通りである。「場」の中に「個」が溶け込んでしまったように見られる。場に溶け込んだ個は、個の性質を失い新しい場の想像に寄与する。この逆も考えられる。場の中で個が個として存在を明確化してくると場の力は薄くなり性質も変わってくる。

場—————個
母性の形態

個と場は、母性が現実の世界で示す姿の両極である。文化の違いによって個で示されたり、場で示されたりする。づし王を取り巻く母性の姿はこれまで見てきたように場の形をとる。そして、人が成長するに必要な変化の過程を、いくつかの場で構成し、その場が連なって、人の生涯を完成させる。

地蔵菩薩を取り出し、母御の両眼に当てたまひ、「善哉なれや、明らかに。平癒したまへ、明らかに」と、三度なでさせたまひければ、つぶれて久しき両眼が、はっしと明きて、鈴を張りたる如くなり。

母は地蔵菩薩によって開眼しづし王と再会する。

づし王は安寿の菩提を弔い、丹後の国に御堂を建てた。今でも、金焼地蔵菩薩として人々から崇められている。

物語に見られる母性の特徴

この物語りに見られる母性の特徴は、次のようにまとめられる。

1 個より場に依存する

づし王の母が持つ母性は限りなく優しいもので、その優しさは、誰に対しても時を越えて示された。この優しさは、個人の意志に依るところは少ない。それは、与えられた生活環境に対して改善を求める働きかけが見られない事で判る。望ましくない環境（子供が育つ上で）が出現すればその環境を改善すべく戦うことが必要ではなかろうか。この戦う姿が見られない。ひたすら運命として従順に従うのみである。づし王が、太夫の所で過酷な労働を強いられた時も、ひたすら耐えることであった。育てる方も、育てられる方もその環境を運命と諦め、耐えることで凌ごうとする。耐えること、即ち、個を殺すことであり、個を殺すことによって全体性へ移行していく。個性を持った母が、母一般（母なるもの）に移行する。

2 場の移動

深い愛情に支えられて幸せに暮らしていたづし王が父のいないことに気づく。父を求めて移動が開始される。この動機づけが無意識的（燕を見て悟る）に行われる。そして山椒太夫の館に生活の場が移される。やがて国分寺——天王寺——梅津院と生活の場が移行する。この移行が運命的、自然的に行われる。場の移動について、自分からは闘う姿勢が感じられない。他力本願的である。しかし一見他力本願的に見えるこの行動もよく見ると必然が感じられる。即ち、耐えることが移行の原動力になっている。耐えることが個を殺し場にエネルギーを蓄積させ、そのエネルギーが個を次の場に移行せしめる。

3 一つの場は一つの働き

一人の母親が子供の成長によって態度を変えていくと言うことは、この物語りにおいては見られない。一つの場は一つの機能を有する。同一の場で異なる働きをする場合は、場の中に新たな場が形成される。例えば、さんせう太夫の館において別屋が持たれ、違った生活が営まれるが如きものである。

4 場の無意識性

場は現実にあって、育てる役割を、現実作用の中で相互的に行われるが、同時に、非現実の世界とのつながりも見られる。大きな運命の力によって引き裂かれたづし王親子は、ひたすら地藏菩薩にすがる。この神仏との交信は、場の性格を一層深みのあるものにする。立体的なものにする。個人として考えれば、無意識との交信を可能にするものである。反面、非個性的な、一般的なものになる。

5 現実受容としての場

づし王親子はいかなる時も現実をありのままに受け入れた。現実がいかに厳しくとも、いかに不合理なものであっても、これを受け入れ耐えた。耐えることによって、事態は新しく

動き出す。

物語の中に日本の母の心を見ようとして、深層心理の立場からさんせう太夫の物語を見てきた。物語は、多くの人に受け入れられた読み物であり、話であるから、それを分析することによって、人の心を知ることが出来ると考えた。幾つかの特徴を見いだすことが出来た。今後は、より一層細かく、深く多くの物語を分析し、日本の母性の構造を明らかにしたい。

引用文献

- 1 河合隼雄 母性社会日本の病理 1976 中央公論社
中空構造日本の深層 1982 中央公論社
昔話と日本人の心 1982 岩波書店
昔話の深層 1977 福音館書店
- 2 岩崎武夫 さんせう太夫考 P 8 1973 平凡社
- 3 “ “ P 225 “ “
- 4 荒木繁 説経節 P 309 1973 平凡社
山本吉左右
- 5 “ “ P 3——P 57 “
- 6 室木弥太郎 説経集 P 81——P 152 1977 新潮社
- 7 “ “ P 65——P 127 1979 桜楓社
- 8 荒木繁 説経節 P 308 平凡社
山本吉左右
- 9 “ “ P 309 “
- 10 “ “ P 319 “
- 11 河合隼雄 昔話の深層 P 57 1977 福音館書店
- 12 “ “ P 53 “ “
- 13 金田鬼一訳 グリム童話集 岩波文庫
- 14 元型 ユング心理学の基本概念
- 15 おうこ 天秤棒
- 16 岩崎武夫 さんせう太夫考 P 50 1973 平凡社
- 17 “ “ P 50 “ “
- 18 “ “ P 58 “ “
- 19 “ “ P 63 “ “
- 20 “ “ P 54 “ “

注 1

- 1 文中引用した原文は「説経集新潮日本古典集成1994室木弥太郎校注」による
- 2 ヘンゼルとグレーテルの物語については、グリム童話集（金田鬼一訳 岩波文庫）による
- 3 「うわたき」は乳母の名
- 4 厨子王は「づし王」と表現した